

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370015

研究課題名(和文) ウーシアーと実体 存在論の基礎概念の形成

研究課題名(英文) ousia and substance: a study of the formation of the basic ontological concepts

## 研究代表者

中畑 正志 (Masashi, Nakahata)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：60192671

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)： アリストテレスのウーシアーという語は、従来の日本語訳では「まさしき物」を意味する「実体」と訳されてきた。しかし本研究は、多くの箇所でもウーシアーと「何であるか」という表現との互換的使用の確認、「トデ・テイ」「ヒュボケイメノン」などの関連諸概念の分析などを通じて、ウーシアーの基本的な意味は「何であるか」という問いに対して応答するものであることを示した。

さらにこのような意味のウーシアーがストア派においては物的存在の原理として変容されて理解され、このことがギリシア語のhypostasisと字義通りには対応するラテン語substantiaという語と結びつくことを可能としたことを跡づけた。

研究成果の概要(英文)： The Japanese word "jittai", which means "real thing" or "real body", was introduced as a rendering of the English word "substance", but is now widely used as a standard translation of the Aristotelian term "ousia" in Japan. In this project, by examining Aristotle's use of that term and other related concepts such as "ti esti", "tode ti" and "hypokeimenon", I demonstrate that the primary meaning of "ousia" is not substance or "jittai" (real thing) but (an entity) which is what it is. This shows that Aristotle basically accepts the Platonic understanding of this term.

Furthermore, I also investigate how the Stoics transformed the meaning of the term and show that this transformation made it possible to translate "ousia" into the Latin word "substantia", even though "substantia" is etymologically equivalent to the Greek "hypostasis".

研究分野：西洋古代哲学

キーワード：ウーシアー 実体 アリストテレス 存在論 ストア派

### 1. 研究開始当初の背景

「実体」とは、明治初期に西周が substance の訳語に宛てた言葉（もともとは漢語）である。西周はこの言葉を「まさしき物」「まさしき体」の意味で理解して訳語として使用した。そのような意味での「実体」は、substance の訳語として定着するにとどまらず、現在ではアリストテレスの術語「ウーシアー」(οὐσία) の訳語としても定着している。アリストテレスの「ウーシアー」が西洋の伝統において、ある時期からラテン語の substantia と結びつき、そして近代以後には substance, Substanz と訳されてきたからである。

アリストテレスのウーシアーも、substance, Substanz なども、西洋の存在論の歴史において、最も基礎的な概念の一つである。また substance の概念は「分析形而上学」などの形而上学的議論が興隆するなかで、近年では再び多くの議論がおこなわれている。しかし substance も、その概念の源泉と考えられているウーシアーも、歴史的にどのように形成されたのか、そして語源的には直接関係のないこの二つの概念がどのようにして関連させられたのか、という点については、いまだに不明な部分が多い。たとえば、ギリシア語「ウーシアー」はキケロらの報告によると、まず essentia という造語によって訳されていたとされるが、語源的にまったく別系統の言葉であるラテン語の substantia も訳語に使用されるようになった。substantia がウーシアーの訳語として西欧において定着するのに決定的な役割を果たしたのはポエティウスによるアリストテレス『カテゴリー論』のラテン語訳であるが、しかし当のポエティウスは『エウテュケスとネストリウス論駁』第三章では、「ウーシアー」に essentia を、「ヒュポスタシス」(ὑπόστασις) に substantia を当てている。

ウーシアーや substance のそれぞれの概念の重要性を考えるなら、その歴史的な背景や形成過程は解明するに値すると思われるが、しかし以上の観察からだけでも垣間見られるように、それぞれの概念の形成や受容にかかわる経緯はきわめて錯綜していることもあり、従来の研究では十分にあきらかにされているとは言えない。あらためて検討する必要があると考えられる。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、次のとおりである。

(1) 古代哲学の基本概念である「ウーシアー」の基本的意味を、まずプラトン以前とプラトンについて確認したうえで、アリストテレスにおける意味を、具体的使用状況と関連する諸概念を従来の研究より詳しく分析することを通じて見届ける。

(2) (1)を通じて確認された「ウーシアー」の概念が、アリストテレス以後ストア派をはじめとした古代後期哲学においてどのように

受容され、また変容させられたのかを跡づける。

(3) 「ウーシアー」のラテン語の訳語は、当初は essentia であったにもかかわらず、ある時期から substantia も使用されることになる。このような経緯を跡づけるとともに、その理由を考察する。

(4) 以上の作業を通じて、ウーシアーと substance の概念をはじめとした、存在ないしは「ある」ことに関わる錯綜したいくつかの思考の歴史を分節して整理し、現代の存在論のあり方について歴史的な視座から再考することを旨とする。

### 3. 研究の方法

(1) 「ウーシアー」の概念の成立過程については、アリストテレス以前のこのギリシア語の使用についての網羅的な調査である Motte & Somville, *Ousia dans la philosophie grecque des origines à Aristote*. 2008 を参照しながら、プラトン以前の「ウーシアー」の語の使用状況、およびプラトンとアリストテレスの著作におけるこの語の用法、そしてプラトンとアリストテレスの間での言葉の意味理解の継承関係を確認する。

とりわけアリストテレスについては、従来は「或るこれ」と訳され「これと指示される個物」の意味で解されてきた「トデ・ティ」(τὸδε τι) あるいは従来「基体」と訳されてきた「ヒュポケイメノン」(ὑποκείμενον) といった密接に関連する諸概念についても、これまでの解釈にとらわれず、アリストテレスの用法を再検討して、より正確な意味の理解につとめる。

(2) ストア派とりわけ中期以後のストア派においても「ウーシアー」は重要な概念であるが、(1)で解明された概念理解に照らして、この概念がどのように受容され、また変容されたのかを分析する。

(3) キケロ、セネカ、クウィンティリアヌスなどの著作家による「ウーシアー」のラテン語への翻訳状況についての報告を検討し、当初の訳語として導入された essentia ではなく、語源的にはギリシア語「ヒュポスタシス」に対応するラテン語 substantia が「ウーシアー」の訳語として用いられるにいたった経緯を解明する。

### 4. 研究成果

(1) 「ウーシアー」という語は、英語の be と同じく「～がある」も「～である」も意味しうるギリシア語の動詞 εἶναι から派生した名詞であるが、プラトン以前にはヒポクラテス文書の数例を除いたほぼすべての用例において、財産や富、所有物などの経済的な意味で使用されていた。

これに対して、プラトンはこの語にそれとは異なる重要な用法を確立して普及させた。

すなわち、プラトンの初期から中期の著作において、この語は、ある特定の「あり方」「特性」を示し、とりわけ「Xのウーシアー」という形で「Xとは何であるか」という問いに対する答である「まさにXであるもの」を表現しており、この用法は彼の後期著作においても一貫して確認できる。そしてこの「まさにXであるもの」は、いわゆるイデアを指示する表現としても使用されている。

他方、プラトンの後期著作においては、「ウーシアー」がより一般的に「ある(こと)」「あり方」を意味する場合もあるが、その場合でも「～である」という意味を含んでおり、それと切り離された意味での「～がある」すなわち単なる「存在」を意味するものではなかった。

(2) アリストテレスがその哲学における根本概念として使用する術語としての「ウーシアー」も、このプラトンの理解を継承して、「何であるか」という問いに回答するものをその基本的な意味としていることが確認できる。

従来の解釈では、アリストテレスの「ウーシアー」は、「個物・事物」と「何であるか」ないし「本質」という二つの意味をもっており、カテゴリーとしてのウーシアーは前者の意味であり、substanceや「実体」と訳すべきだと考えられてきた。この解釈に従うなら、アリストテレスのウーシアーは二義的であり、その一方のカテゴリー的な意味は「事物」「個物」であることになる。

しかしアリストテレスの著作では、カテゴリーとしての「ウーシアー」でさえ、多くの箇所「何であるか」という表現と互換的であるかのように使用されていることが確認される(Klaus Oehler. Aristoteles: Kategorien, (Aristoteles Werke in deutscher Übersetzung; Bd. 1, T. 1)におけるカテゴリー表現の網羅の一覧を参照)。さらに、同じくウーシアーと互換的に使用される「トデ・ティ」は、支配的解釈では「トデ」が(眼前のものを)「これ」と指示する指示詞(demonstrative)と受け取られているために、しばしば「これと指示される個物」を意味する表現と解されてきたが、「トデ」は種(sortal)を表わすような名詞の代用表現であることを文献学的に論証しうる。したがって「トデ・ティ」も、「何であるか」という問いに回答するものの表現であると理解することができる。さらにウーシアーの概念と密接に関連する「ヒュポケイメノン」も、従来は「基体」と訳され「根底に存在する事物ないし物体」を意味すると受け取られたために、「実体」という概念となじむと考えられてきた。しかし「ヒュポケイメノン」も、それぞれの事象を理解するうえでその事象に対して先行的に措定されて把握されているものを表現している。

アリストテレスのテキストの精査にもとづいて確認されるこうしたすべての事情は、アリストテレスにとっても「ウーシアー」が

「実体」「事物」でなく「何であるか」に回答するものであることを基本として理解されるべきことを示している。

さらに、以上の理解にもとづいて、「個物」「事物」としての「実体」と「何であるか」を示す「本質」というウーシアーの二義性という主張についても、そう理解(誤解)されてきた理由も説明することが可能である。「ウーシアー」は基本的に「何であるか」という問いに回答するものを表示する。主張されてきた二義性は、実は意味の相違ではなく、「何であるか」という問いが向けられるものないし問い方の相違であり、その相違に応じた表現の指示対象の相違である。たとえばソクラテスについて、それが「どれだけか」と問われれば1 m 7 0 cmと量を答え「どのようなか」と問われれば「白い」などの性質を答えるのに対して、「何であるか」と問われるなら、われわれは「人間」というその種を表わす表現で答えるであろう(カテゴリー論におけるウーシアー)。この答え「人間」は、問いが向けられた「当の人間」としていわゆる個体としての人間をも表示しうるが、同時のその種 的形相としての「人間」をも表現しうる。そしてアリストテレスにとって、「何であるか」が当のものを当のものたらしめるものを問う問いであるとき、後者がその答えとなるものであった。

したがって、「ウーシアー」の意味(指示対象ではなく)を、事物や個物を意味するsubstanceや「実体」であると理解することは、アリストテレスの思考の在処を見失わせる大きな問題を孕んでいる。

(3) ウーシアーの概念は、アリストテレス以後に、とりわけ中期ストア派において、根本的な意味の変容を被ることになる。

ストア派の世界観では、世界に「ある」ものは物体だけである。そして世界の全体とそれが含むそれぞれの物体は、ともに能動原理と受動原理という二つの原理によって通時的にも共時的にも構成される。個々の物体については、能動原理は物体に認められる規定的局面、すなわち物体の「ある」ことのうちで「何であるか」ないし「～である」という局面を担う原理であるが、受動原理はそのような規定を受け入れつつそれを具体的物体として成立させる原理である。言い換えると、非規定的な原理として、「～がある」という、物体としての存在の局面を担う原理としてはたらく。そしてこの受動原理のほうだが、「素材」(ύλη)とともに「無規定・無性質のウーシアー」と呼ばれてもいる。したがってこうしたストア派的理解では、ウーシアーはそれ自身は「何」とも規定されないような物的な「存在」を支える原理を表現すると言いうる。これは、プラトンやアリストテレスにおいて「何であるか」という問いに答えるものを基本的に表わした「ウーシアー」からの概念理解のうえでの大きな変貌である。

(4) 他方で、ラテン語 substantia、および語源的にはその源泉と考えられるギリシア語「ヒュポスタシス」は、しばしば「現われ」「想念」「言語」などの人間の心的活動を含む事象と対立するような意味で使用され、いわば心的活動から独立の物事のあり方、ないしは「客観的存在」を表わす表現として使用されていた。このような背景のもとで、ストア派においては「存在の原理」的な意味で理解されたウーシアーは、弁論家クウィンティリアヌス『弁論家の教育』などの著作において、essentia という語で訳されてはいるが、実質的な意味の理解においては「存在する」ことにかかわる概念として使用されている substantia とある仕方で関係づけられていることが確認できる。

(5)ウーシアーを substantia として理解する伝統においては、以上の経緯が示唆するように、ウーシアーは「存在」の原理として解釈される。これは現在でもウーシアーの有力な解釈である。しかし、アリストテレスにとって世界理解の根幹となるウーシアーの概念は、「存在」ではなくそれぞれのものの「何であるか」を示すことを基本的な意味としていた。

現代の哲学においては、オントロジーは、とりわけ W.v.O.Quine の論文 "On what there is" 以後「何が存在するのか」をその中心的な問いとしている。しかし「オントロジー」という語の語源であるラテン語 ontologia は、現在確認されるかぎりでも最も初期の使用者である Jacob Lorhard らの著作においては、アリストテレス『形而上学』での探求、とりわけ「あるというかぎりでのあるもの」の探求を念頭に置いて導入された言葉である。そしてアリストテレスにとって「あるというかぎりでのあるもの」の探求は、これまで確認された意味でのウーシアーの探求に収斂するものであった。

この研究成果が示すように、そのウーシアーが「存在」よりも「何であるか」を基本的に意味するならば、その意味でのウーシアーを根幹とするアリストテレスの考察は、「存在」の問題を中心とした現代のオントロジーとは異なるオントロジーの可能性を示唆していると言えるであろう。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

中畑 正志、個体と指示 アリストテレスは何を語り、何を語らないか、哲学雑誌、査読あり、803 号、2016、53-75

中畑 正志、志向性と意識 プレンターノをめぐると、フッサール研究、査読あり、12 号、132-158

中畑 正志、自己知の原型とその行方 二つの格言をめぐって、古代哲学研究、査読

あり、67 号、2015、1-18.

Nakahata Msashi, Aristotle and Descartes on perceiving that we see. The Journal of Greco Roman Studies, 査読あり、2014、53 (3), 99-112.

〔学会発表〕(計 6 件)

中畑 正志、アリストテレス的オントロジーの基本的視点 新しい記述的形而上学の試み、アリストテレス生誕 2400 年記念シンポジウム「アリストテレスの実体論：範疇、様相そして記述的形而上学」, 2016 年 7 月 23 日、北海道大学

中畑 正志、アリストテレスは「実体」も「存在論」も語らない、龍谷学会・龍谷哲学会共催学術講演会、2015 年 12 月 11 日、龍谷大学大宮学舎

中畑 正志、指示と個体化 アリストテレスは何を語り、何を語らないか、哲学会シンポジウム「根拠・言語・存在：井上忠の哲学」, 2015 年 11 月 1 日、東京大学

中畑 正志、異色、接ぎ木、異種交配 「実体」概念の迷路、東洋大学国際哲学センター方法論シンポジウム、2015 年 2 月 28 日、東洋大学

中畑 正志、オントロジーの成立 西欧におけるあると存在をめぐる思考の系譜、「インド哲学における存在をめぐる議論の解明」シンポジウム、2014 年 11 月 23 日、東京大学

中畑 正志、もう一つの心理学史 魂の学と生態心理学、日本生態心理学会第 5 回大会、2014 年 7 月 14 日、豊田工業大学

〔図書〕(計 3 件)

中畑 正志 他、春風社、越境する哲学：体系と方法を求めて、2015、221-265

中畑 正志 他、世界思想社、プラトンを学ぶ人のために、2014、138-157

中畑 正志 他、世界思想社、新プラトン主義を学ぶ人のために、2014、183-188

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

中畑 正志 (NAKAHATA, Masashi)  
京都大学大学院文学研究科・教授  
研究者番号：60192671

##### (2) 研究分担者

##### (3) 連携研究者

##### (4) 研究協力者

( )